

インタビュー —3・11から10年—

死者にことばをあてがえ

——じゃーナリズムの先輩として、これまでの震災報道をどうみていましたか。

「不満です。例えば（米軍が被災地を支援した）トモダチ作戦では、米軍という極めて戦略的な存在を善意とかいう感情の存在にメディアが置き換えてしまった。あるいは天皇が現地に行って膝をついて被災者の手を取ってねぎらう場面が大きなニュースになる。善意や愛護、絆や団結ばかりが取り上げられる」と、

——社会全体が現実を直視していないとも言えますか。

「僕は個人的に3・11という巨大な破壊と消失を悼むのだけれど、みんなで心を一つにしようと書けない。驚きであれ怒りであれ悲しみであれ、出来事に体が反応する。そして僕の場合は言語化するんです」

——ジャーナリストの先輩として、これまでの震災報道をどうみていましたか。

「報道が本来の役割を果たしてない」ということです。僕はもともとジャーナリズムに期待していません。新型コロナウィルスを巡る報道にしても、今日の感染者数は何人か、重症者数や死者数はと無味乾燥な数字の羅列に人々の物語が置き換えられている。リアリティーや感覚を避けているところが

——避けているんですか。

「避けているし、逃げているし、

数字を羅列する

——そういう体験は初めてですか。
「あれほど明確になったのは初めてです。自分が生まれ育った場所が被災し、身近な人が亡くなつた。常が根こそぎ破壊されたように感しました。津波に襲われた市街地でガスボンベが爆発して火が上がりました。テレビには映らなかつたけれど、あちこちに遺体が転がついた。んな故郷の風景は、自然災害といふより、まるで戦場のようでした」



あの震災で「言葉を失った」という作家が少なくありません。刃
見さんはいかがでしたか。

④ 作家 辺見庸さん

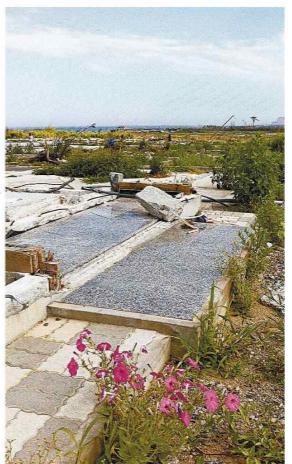
東日本大震災、甚大な被害を受けた宮城県石巻市。石巻出身で元共同通信記者の芥川賞作家、辺見庸さん(76)は、震災による故郷の破壊に衝撃を受けつつも、その後、社会はどう変わったか、変わらなかつたのかを冷静な目で見つめ、言葉を紡いできた。震災10年を前に辺見さんを訪ねた。

けた宮城県石巻市。石巻出身で元
唐さんでは、震災による故郷の
社会がどう変わったか、変わら
ず、言葉を紡いできた。震災10年を
(聞き手・編集委員 関口裕士)

数字を羅列する報道 人の物語紡がず



へんみ・よう 1944年生まれ。早稲田大卒。70年共同通信社入社。北京、ハノイの特派員などを務め、中国報道で78年に日本新聞協会賞。91年に小説「自動起床装置」で芥川賞。96年退社。ルボ「もの食う人びと」(講談社ノンフィクション賞)、詩集「生首」(中原中也賞)、「眼の海」(高見順賞)など著書多数。震災後に書いた小説「青い花」と「霧の犬」が昨年来相次いで文庫化された。



津波で流され基礎部分だけが残った
住宅——2001年7月、福島県南相馬市（関裕太撮影）

会的には、大きな物語の中に回収する仕組みというのがあります。炊き出しの行列で列を乱す人がいないと、いう話が美化されて、礼儀正しく秩序を重んじるという日本人像にみんなが満足する。その一方で、僕の田舎でも外から来た人が死者の懐に手を入れて力を取ったという話がありますが、そういう話は消えていく。隠されていく。その結果、義談であれ悲劇であれ、分かりやすく伝えやすい話ばかりが紋切り型の表現で伝えられています。

——見たくないものから目を背けてしないことがありますか。

「見ていても見なかつたことにして、やがて見なかつた」聞かなかつたと記憶を書き換えられる。さらに深刻なのは、私たちが3・11から何を学ぶか、どう生き方をしていけばいいかという問いかけを全くしていないことです。

——していないですか。社会は変

——辺見さんの小説や評論は美在の人の名や地名が数多く登場して、容赦なく批判もします。「NHKの復興支援ソング『花は咲く』を小説だからかって、出版社から書き直してくれと言わされました。きわどい表現は自己規制してしまって。そういう空気が一番怖いと思う。そういう空気が

あしきにつけ、あらわになります」「——あらわになつたけれど直視しづらなかつたといふことですか。「例えば関東大震災の時に行われた朝鮮人の虐殺もそうです。自國で起きたことでさう犠牲者数に大きくなつてゐるが、この国では戦争責任をもつてやむやにした。慰安婦問題や徴用工場問題もそうです。歴史を塗り替えなさい」といふのです。

本から考へ直そうという動きはありませんでした

出来事は起つたぞ」 ようか。 3・11

「それは起つたぞ」 ようか。 3・11

のような災害は必ず来るし考へたま
うがいい。 今日から知れないし明日
かもしない。 人間も文化も社会も
脆弱です。 壊れる。 もろい。 私た
ちはそれを暗黙の前提にして生きて
います。 東日本大震災に比肩し得る
のは(1923年の) 関東大震災で
した。 その時も政治や社会だけでは
なく人間の内面に根源的な影響を与え
ました。 大きな災害があると、社会
の実相みたいなものが、書きつけ
られました

洋さんの詩「存在」に「二人
死」と言つた「太郎と花子が
死んだ」と言ふところある。 辺見
庸さんの詩や小説を読み、話を
聞いてこの詩を思い起しました。

警察庁によると、東日本大震
災の死者数は1万5800人。
行方不明者は25529人(昨年
3月時点)。 震災関連死を除く。
亡くなつた一人一人の名前を読
み上げるだけでも、どれぐらい
時間がかかるだろうか。 その數
字の向こう側に一人一人それぞれ
の日常があつたことを忘れず
にいたい。

聞き手から

最終回は3月7日で、写真家の大石芳野さんです。